

1 「本質的な問い」による単元（題材）構想について

- 本質的な問いを設定することで、本単元での目標を常に意識して授業をすることができた。また、毎時間単元を貫く問いに対して振り返りをさせることで、本単元のルーブリックを自分たちの言葉で作り上げることができ、どんなスピーチをしたいか具体的な姿を多くの児童が思い描くことができた。
- 「単元を貫く問い」を1時間目に出し、それに対する児童の課題（苦手なことや、その原因など）を始めに出させたことで、児童が苦手を克服するためにどうすればよいのか仮説を立て、主体的に学習を進めることができた。また、「単元を貫く問い」を毎時間確認することで、本時の課題が児童につかみやすくなり、主体的な児童によるめあて設定に大変役立った。この考え方は本中学校区で研究している逆向き設計シートによる授業改善と非常に結び付きがあり、校内の授業改善でも大きな成果となった。

2 単元（題材）で育成を目指す資質・能力について

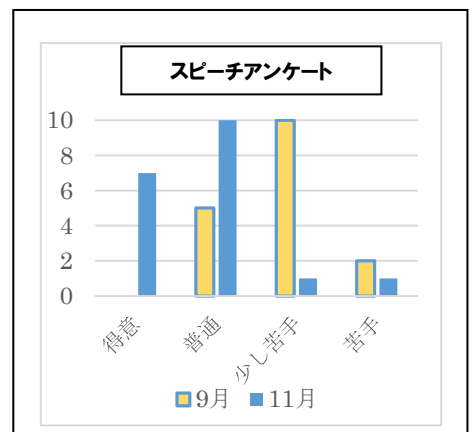
【本単元のパフォーマンス課題に対するルーブリックと本学級児童の割合】

尺度	スピーチ	%
3	話の中心が明確になるように、理由や事例を <b>複数</b> 挙げて話の構成を考え、相手を見て、 <b>伝えたいことが相手に伝わりやすいよう工夫</b> して話している。	74
2	話の中心が明確になるように、 <b>理由や事例を挙げて話の構成を考え、相手(クラス全体)を見て</b> 話している。	21
1	相手に伝わるように話の中心を選び、話の構成を考えて話している。	5

安浦中学校区では、単元のパフォーマンス課題を単元（題材）で育成を目指す資質・能力を総合的に見とる物として評価している。

【知識・技能】

- 単元前の児童の半数以上がスピーチを苦手と回答していたが、単元1ヶ月後では8割以上の児童が肯定的な回答に変化した。苦手意識の原因は、多くが何を話したらいいのかわからず、話がすぐに終わってしまうことであった。そこで、総合的な学習の時間での児童の経験や探求を元にした地元安浦の好きなところを話の中心として単元を構成したことで、児童が主体的に取り組むことができたといえる。



【思考・判断・表現】

- 聞き手が興味を持って聞けるよう、話の中心に入れる事例を各自の経験や感じたことを入れたオリジナルのエピソードが入ったスピーチにして行くことが大切であると気付くことができた振り返りの割合が多かった。（A評価児童振り返り参照）
- 課題は、苦手意識をもつ児童がまだ1人いることである。該当児童は、個別の支援を必要とする児童であり、人前で話すことに非常に不安を抱いている。不安の原因は、これでいいのかわからないという学習の見通しの持てなさから来るものであると考えられる。

自分だけのエピソードをメモに書いて話すと伝えたいことが詳しく伝わるようになりました。  
**A評価児童の振り返り**

【主体的に学習に取り組む態度】

- 単元終了後も、本単元の経験をもとに、毎朝のスピーチも、自分の経験やエピソードを取り入れた伝えたい内容の濃いものに変化しており、スピーチが、児童にとって楽しみなことの一つになっている。

3 「デジタル機器」の活用

- スピーチの練習の際、ロイロノートで録画させ、自分のスピーチを聞き返すことで、客観的に自分のスピーチの内容や話し方を評価させ、改善を図ることができた。この方法は、スピーチだけではなく、音楽のリコーダー演奏など、幅広い面で活用し、効果を感じている。
- 録画機能の使い方や、個人情報の扱いなど、きちんとした指導が必要である。

別紙様式